

2. 額拉蘇 C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体

——直良報告以外の資料について——

金子浩昌

本遺物が1933年7月、駒井和愛、水野清一両博士によって発掘、採集されたものであることは別掲の直良信夫先生報文に記されている通りである。また本遺物を筆者がみるに至った経緯についても、大貫静夫、平井尚志両氏の文に記されている。

直良先生の御覧になったものが、筆者がここでのべたものの一部であることは、総骨片の数からみて、ここで扱ったものの方がはるかに多いことから推測されよう。そして、本文中にふれているように歯牙、顎骨類は筆者のみた資料中にはほとんどなく、それらは当初から重要資料として別に扱われていたものと思われる。魚・鳥骨についても、完存、もしくはそれに近い骨は直良先生報文にあるところをみるとこれも別に扱われていたようである。そして、報文中ではそれらの標本の個数をいちいち記され、その他に、断片、破片などのあるような書き方をされていない。しかも、筆者が見た標本中には直良先生記載のものは一点もないので、当初から標本は区別されていたもののように思うのである。今日、直良先生記載の標本については行方不明である。早稲田大学工学部の獣類化石研究室もしくはお宅にあったものが空襲で焼失した可能性もある。これについては今確めようもない。このようなわけで以下に記す標本はこれまで記載されることのなかったものであり、資料的な価値は大きい。特に魚、鳥類については標本も多く、遺跡の性格、石器時代人の漁猟活動の在り方を考察するための重要な資料である。獣骨についても直良先生記載を補足するものがある。

直良信夫先生は昨年秋亡くなられたが、その一周忌を迎えるに当って、先生の教えを受けたものの一人として、かつて先生が手がけられたオロス遺跡出土の動物遺存体を扱うことには深い感慨を覚えるものである。

今回この貴重な標本の調査の機会を与えられた東京大学文学部考古学研究室の大貫静夫氏に深く感謝の意を表するとともに、直良先生御遺稿を併せて発表することを承諾して下さった平井尚志氏にも厚く御礼申上げる次第である。直良先生原稿については、旧稿をそのまま掲載したが、漢字の用法などで現在では読みにくい部分はひらがな書きとし、地名などについても表記を改めたところがある。

なお、ウシ類の骨について鹿児島大学農学部西中川駿先生に御教示を得た。記して感謝申上げたい。

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

額拉蘇C遺跡出土動物遺存体の種名表

<p>I 軟体動物門</p> <p>a 二枚貝綱</p> <p>古異齒目</p> <p>イシガイ科</p> <p>1. イシガイ</p> <p>2. ドブガイ属</p> <p>II 脊椎動物門</p> <p>a 硬骨魚綱</p> <p>コイ目</p> <p>コイ科</p> <p>1. ソウギョ</p> <p>ナマズ目</p> <p>ナマズ科</p> <p>2. 属・種不明</p> <p>ギギ科</p> <p>3. 属・種不明</p> <p>タイワンドジョウ目</p> <p>タイワンドジョウ科</p> <p>4. カムルチー</p> <p>b 鳥 綱</p> <p>カイツブリ目</p> <p>カイツブリ科</p> <p>1. カイツブリ属</p> <p>ガンカモ目</p> <p>ガンカモ科</p> <p>2. ヒシクイ属</p> <p>3. カモ属</p> <p>ワシタカ目</p> <p>ワシタカ科</p> <p>4. 属・種不明</p> <p>キジ目</p> <p>キジ科</p> <p>5. 环頸雉</p> <p>c 哺乳綱</p> <p>ウサギ目</p> <p>ウサギ科</p> <p>1. ノウサギ属</p> <p>食肉目</p> <p>イヌ科</p> <p>2. イヌ</p> <p>3. オオカミ</p> <p>4. キツネ</p> <p>5. タヌキ</p> <p>偶蹄目</p> <p>イノシシ科</p> <p>6. イノシシ</p> <p>シカ科</p> <p>7. ノロジカ</p> <p>8. タイリクジカ</p> <p>ウシ科</p> <p>9. ウシ</p>	<p>I Phylum Mollusca</p> <p>a Class Pelecypoda</p> <p>Order Paleo heterodonta</p> <p>Family Unionidae</p> <p><i>Unio douglasiae</i></p> <p><i>Anodonta sp.</i></p> <p>II Phylum Vertebrata</p> <p>a Class Osteichthyes</p> <p>Order Cypriniformes</p> <p>Family Cyprinidae</p> <p><i>Ctenopharyngodon idellus</i></p> <p>Order Siluriformes</p> <p>Family Siluridae</p> <p>Gen. et sp. indet</p> <p>Family Bagridae</p> <p>Gen. et sp. indet</p> <p>Order Channiformes</p> <p>Family Channidae</p> <p><i>Ophicephalus argus</i></p> <p>b Class Aves</p> <p>Order Podicipediformes</p> <p>Family Podicipitidae</p> <p><i>Podiceps spp.</i></p> <p>Order Anseriformes</p> <p>Family Anatidae</p> <p><i>Anser sp.</i></p> <p><i>Anas sp.</i></p> <p>Order Falconiformes</p> <p>Family Accipitridae</p> <p>Gen. et sp. indet.</p> <p>Order Galliformes</p> <p>Family Phasianidae</p> <p><i>Phasianus colchicus</i></p> <p>c Class Mammalia</p> <p>Order Lagomorpha</p> <p>Family Leporidae</p> <p><i>Lepus sp.</i></p> <p>Order Canivora</p> <p>Family Canidae</p> <p><i>Canis familiaris</i></p> <p><i>Canis lupus</i></p> <p><i>Vulpes vulpes</i></p> <p><i>Nyctereutes Procyonoides</i></p> <p>Order Artiodactyla</p> <p>Family Suidae</p> <p><i>Sus scrofa</i></p> <p>Family Cervidae</p> <p><i>Capreolus capreolus</i></p> <p><i>Cervus hortulorum</i></p> <p>Family Bovidae</p> <p><i>Bos taurus</i></p>
---	--

動物遺存体の記載

I 軟体動物

イシガイ

完存する標本がないが、殻長70.0に達する大型の標本も含まれる。しかし、多くは殻頂55.0～60.0前後、殻高27.0～29.0前後のものであり、イシガイとしては普通の大きさであったと思われる。

ドブガイ属

小断片が1点あったのみである。

貝類については標本も少なく、多くを知ることはできない。しかし、おそらくイシガイがもっとも多く採られていたのであろう。ドブガイは殻は大きくなるが、殻厚うすく破損し易い。従って、どの程度採れていたか明らかでない。

発掘されていたイシガイは加熱され灰色に変色しているものが多かった。直接火の上に乗せられた可能性がある。

II 脊椎動物

1. 魚 類

コイ科 ソウギョ

咽頭骨 Pharyngeal が多くのこされていた。残念なことに完存する標本がなく、中程で折れているもののみである。また歯はすべてはずれている。上下に折れている標本を接合することを試みたが、完全な形にもどすことができた標本は一点もなかった。従って、破片から推定される個数は、左右と上下の破片数に近くなる可能性がある。

左側上部9、下部6、右側上部3、下部3、が咽頭骨の総数である。この他に直良報文中に3個あるのはこれの完存標本であり、歯ものこっていることが記載でわかるが、左右の区別が無いので上記の数に加えられない。直良報文には歯高5.0～6.5とあってかなり大きい。本標本中の大型のものに当る大きさであったろう。推定される体長は小さなものでも40～50cm、大きな個体は1mに達するような大きさのものであったと考えられる。

ナマズ

ナマズとしたのは前上顎骨、歯骨、胸鰭刺片の3個である。前上顎骨や胸鰭などによると、かなり大型の個体が捕られているがこれもすべて断片的なもので詳細は知り難い。

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

前上顎骨	<i>premaxillary</i>	
咬面幅	9.0	7.0
歯骨	<i>dentary</i>	8.0 (歯骨側面)
咬面幅	6.0	(連合部)
骨体幅	8.0	

ギギ

ギギ属に特徴的な有棘の胸鰭を多く出土し、大きさにも大・小の差がかなりあったようである。しかし小さいものでも体長は30cm近くあり、大きな個体はその倍近い体長があったと思われる。

胸鰭第一棘 *pectoral fin, first spine*

近位骨頭部最大長

R	7.1	7.7	7.8	8.0	8.4	12.6	11.7
L	(?)			8.0	9.0	10.6	20.4

主鰓蓋骨 *Opercular* L 1

擬鎖骨 *Clavicle* R 4, L 2

角骨 *ang.* R 1

カムルチー

多くの骨を出土している。検出された骨の部位もまた多い。しかし、骨が大型であるために完存するものはなく、残存部より原形を推測しなくてはならない。歯骨、角骨、主鰓蓋骨がよく残されているので、頭部がまとめてすてられていたのではないと思われる。本種もまた大小の個体を含み、小さい個体は体長20cm程であったと思われるが、そのような個体は少なく、歯骨、角骨などにみるのは、体長50~60cmに達するものである。

前上顎骨	<i>Premaxillary</i>	R 2	L 1
歯骨	<i>dentary</i>	R 9	—
角骨	<i>ang.</i>	R 7	L 3
方骨	<i>quadrate</i>	R 1	L 1
主鰓蓋骨	<i>opercular</i>	R 2	L 4

歯骨				<i>dentary</i>				
連合部高	5.0	9.0	10.0	10.5	11.0	11.0	13.5	(すべて右)

関節骨 *articular*

全長 56.0 71.0

主髌蓋骨長 47.0

2. 鳥 類

カイツブリ類

カイツブリ類の骨は少ないが、中型と大型のカイツブリの骨が出土している。現在中国東北部で繁殖するのは小型のいわゆるカイツブリ *Podiceps ruficollis* であるらしい。しかし、本遺跡からはこの標本のように中、大型種があるところをみると、水辺を求めて多くのカイツブリ類が集っていたことが推察される。

Podiceps a

鳥口骨 *Coracoid*

全長 GL 42.5

底部幅 B b 16.2

尺骨 *ulna*

遠位端最大幅 Did 8.0

Podiceps b

中足骨 *tarsometatarsus*

近位端最大幅 B P 11.5

骨体最小径 S C 4.0

ガン・ヒシクイ属

後述するキジとともに本遺跡での鳥骨の主体を占める種類である。大型の骨であるので、骨の保存は良くないが、鳥口骨、上腕骨など、良くその特徴をのこす標本がある。破損はしているが、ガン・カモ科中、ハクチョウに次ぐ大きさのヒシクイあるいはガンとみてよい。新しい破損口をみせている骨もあるが、古く割られた破損口もあり、解体もしくは骨髄食のための加工である。

ガン属 ヒシクイタイプ

鳥口骨 *caracoid*

全長(復原推定) GL 82.0

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

上腕骨 *humerus*

近位端最大幅 (復原推定) B P 41.0

骨体最小径 S C 11.0 } 11.6

遠位端最大幅 B d } 24.0

橈骨 *radius*

骨体遠位端に近い位置での長×短径 7.0×7.5

尺骨 *ulna*

骨体略中央位置の長径 8.6 8.6 9.0 10.2

中手骨 *carpometacarpus* 23.7

近位端最大幅

骨体長径×短径 8.3×6.6

第1指骨 *Phalanx* 1

全長 G L { 45.6 } —

全長 L { 45.4 } 44.0

カモ属

中型カモの上腕骨が1点出土しており、その他にこの種のカモの骨は発見できなかった。

上腕骨 *humerus*

骨体最小径 S C 6.0

ワシタカ科 *Aquila* 属

大型タカ類の肢骨がある。直良報文中にクマタカとした骨が記載されているがそれに近い。しかし、骨の保存状態は悪く、大きさを確めることは難しい。

上腕骨 *humerus*

近位端最大幅 B d 39.7

尺骨 *ulna*

骨体略中央径 S D 8.2×8.0

大腿骨 *femur*

骨体最小径 S C { 8.8

遠位端最大径 B d { 19.2

キジ

おそらくもっとも多くの骨を出土しているものと考えられる。しかし、残念なことに骨はすべて

破損し原形をうかがえる骨は一つもなかった。また、鳥口骨、中足骨などの重要骨が一点も含まれていなかったことは、キジ類の家畜化を知る資料としては不十分なものになっている。

現存する骨からみて、標本は大、小二つのタイプのものに大別され、おそらくそれは雌雄の差ではないかと思われる。ただその差がやや大きいので、大型の方はニワトリの可能性もあるが、資料的に充分ではないので、キジ類に含めておく。

肩甲骨 *scapula*

関節部径 Dic 13.0

骨体幅 (関節頸部) 6.0×2.4

上腕骨 *humerus*

近位端最大幅 B P 18.4

骨体最小径 S C { 6.4 { 7.0 { 7.3

遠位端最大幅 B d { 13.2 { 13.4 { 15.0

尺骨 *ulna*

遠位端最大幅 Did 10.2

中手骨 *carpometacarpus*

近位端最大幅 B P 12.3

大腿骨 *femur*

骨体最小径 S C { 6.0 { 7.0 { 7.0 6.8

遠位端最大幅 B d { 12.5 { 14.6 { 14.3

近位端最大幅 B P 14.2

脛骨 *tibiotarsus*

遠位端最大幅 B d { 9.1 { 10.5 { 11.0

同長 D d { 9.6 { 10.8 { 11.2

3. 哺乳類

哺乳類骨類の計測は、主として A. v. d. Driesch (1976) によったもので、符号もそれによったものである。計測単位はmmである。

A. von den Driesch (1976) : A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletin 1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

ノウサギ

出土する骨は少ない。現在の生息状況よりすればモウコウサギであろう。

上腕骨 *humerus*

全長	GL	84.7
近位端最大幅	Bd	14.3
骨体中央径		5.2
遠位骨端最小幅	Bd	10.2

橈骨 *radius*

全長	GL	89.0
近位骨端最大幅	Bd	7.3
骨体中央径	BP	5.7
遠位骨端最小幅	B1	8.6

イヌ属

哺乳類の中ではもっとも多く骨を出土している。別掲の直良報文には上・下顎骨、完存する四肢骨などもあり、ここでのべる標本もそれと合わせてみるべきものであることはいうまでもない。ただ、残念ながら標本の保存は必ずしも良いわけではなく、完存する標本はない。遠・近位いずれか一方の骨端がのこされていれば良い方である。

下顎骨 M₁ (歯冠長 23.0) を残植する右下顎骨片である。咬耗は殆んどなく、崩出して間のないものである。下顎骨は直良報文に、右下顎骨(乳臼歯残植)、左右同一個体下顎骨、右下顎骨(歯牙脱落)の3個体分があり、今回報告の右下顎骨を加えて4個体分となる。M₁の大きさからみて、直良報文中の一つはM₁ 21.5(歯冠長)と小さいものであり、今一つは歯を欠く。この歯牙を欠く下顎骨については、歯槽計測があり、それによると歯冠長22~23.0前後の歯が植立していた下顎骨という。これは今回報告の右下顎骨とほぼ同大のものである。こうしてみると大・小二つの大きさのイヌがいたことになる。

四肢骨 直良報文中で橈骨に三つの大きさによる違いのあることが指摘されている。最も大型になるのは、橈骨全長167.0で長谷部分類(1952年)による大型タイプ、次が橈骨全長155.5で中大型、最小のが橈骨全長134.0で、中型タイプとなる。

これに対して今回調査した資料は幼・若獣個体が多いのが特徴で、そのうち成獣個体のものとみられる橈骨、尺骨、脛骨は、いずれも大型のもので、橈骨で160.0以上、尺骨で190.0に達する大きさと推定される。この大きさは長谷部(1952)の大型に属すものである。さらに同時に出土している若獣個体のものも、近、遠位の骨端骨がはずれているが、骨体はすでに成獣のものと同大程の幅を持ち、これらが成獣個体となれば、上述した成獣の標本と同じ位の大きさになることが推察される。

以上の額拉蘇C遺跡から出土しているイヌ属の遺骸は一般に大きく、本文中においても引用した家犬の大きさ分類で中型から大型にはいる。これらがすべて家犬としてよいかどうか問題である。オロス遺跡の比定されるBP. 6000年代の家犬は、現在知られる限りでは中小及び中型犬（上述の分類規準による）で、中型犬は少ない。従って、大型に属するような大きさのイヌ属はオオカミとみる方がよいと思われる。

下顎骨 (R) *mandibula*

下顎骨体高H. (M ₁ の前・中央・後で計測)	21.4	25.0	27.0
同 厚T. (同)	11.4	12.0	11.4

下顎歯

M₁ : 歯冠長 L. 23.0, 歯冠幅 B. 9.0

肩甲骨 *scapula*

関節窩左右径 BG	{ 16.4	17.0±
肩甲頸部径 SLC	{ 20.6	

上腕骨 (近遠両骨端のはずれた若い個体) *humerus*

上腕骨全長 GL 1	105.6
骨体最小幅 SD	10.8
遠位骨端幅 (関節骨端はずれる) BT.	25.4

橈骨 *radius*

近位端最大幅 BP	{ 18.6	{ 18.5*	{ 17.0*	* : 骨端骨を欠く若い個体のもの
骨体最小径 SD	{ 13.0	{ 11.9	{ 13.0	

尺骨 *ulna*

肘突起横断径	{ 24.4
肘頭最小径	{ 22.0
鈎状突起横断径	24.2 19.8

大腿骨 *femur*

近位端幅 BP	{ 34.0*	* : 骨端骨を欠く若獣
骨体最小径 SC	{ 13.1	

脛骨 *tibiotarsus*

遠位骨端最大幅 Bd	{ 21.0	前後径	15.5
骨体最小幅 SC	{ 11.8		

キツネ

四肢骨 : 左右の橈骨と尺骨が各1点が出土している。直良報文には犬歯1点を記載している。

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

橈骨 *radius*

近位骨端最大幅	B P	} 14.0 (左)
骨体中央径	S C	
遠位骨端最大幅	B d	16.8 (左)

尺骨 *ulna*

肘突起横断径	D P A ~	17.0
肘頭最大径		15.3

タヌキ

四肢骨：完存する橈骨と脛骨片が出土している。直良報文では下顎骨が記載されており、本資料もほぼそれに見合う大きさのものである。

橈骨 *radius*

全長	GL	85.5
近位骨端最大幅	B P	10.0+
骨体中央径	S C	7.0
遠位骨端最大幅	B d	14.6

脛骨 *tibiotarsus*

遠位骨端最大幅	B d	14.0
骨体中央径	S C	7.7

イノシシ

歯牙・顎骨は直良報文中にあり、ここにのべるのは、頭蓋、下顎骨片及び四肢骨のみである。

頭蓋片は左右の側頭骨頬骨突起各1点で同一個体のものか。頭蓋を縦に割った際に後頭骨がはなれて分離したものであろう。本邦産の大形イノシシに匹敵する。切歯骨もほぼ同大の個体のもの。これらは骨の保存状況が似ていて、同一個体であった可能性がある。

橈骨、尺骨、中手・中足骨は保存状態がよく、上記の頭蓋部分と異なる。橈骨と尺骨が計6点あり、4個体分位はある。橈骨はほぼ中央から打ち割られており、尺骨もいっしょに割られている。割れ口には部分的に螺線状の割れを認めることができる。

中手・中足骨は5点があっただけであるが完存するものと、割られているものがある。また中足骨には、骨体の遠位端に近く横位に切痕をみるものがある。筋肉を切り取る際についた傷であろう。

直良報文中の顎骨資料によると、左右揃う上顎骨例にみる ($P^3 \sim M^3$) の咬耗は、 M^1 が全面窩、 M^3 も略平らに近く咬耗が進むというので、エナメル質に小窩があくものであろう。別の左側上顎骨

のM¹は咬耗のない状態であるらしい。このことから前者は4歳以上、後者の例は2歳位であろうか。

頭 蓋 *cranium*

切歯骨 全長

側頭骨頰骨突起幅 (側頭骨のほり出した部分より) R. 33.0, L. 33.0

肩甲骨 *scapula*

関節窩径 BG 26.0+

橈 骨 *radius*

近位端最大幅	B P	33.4	35.5	37.5	} — 45.3
遠位端最大幅	B d				

尺 骨 *ulna*

肘突起径	D P A	} 51.0 38.6
肘頭最小幅	S D O	

中手骨 II or V *metacarpus* II or V

全 長 GL 65.8 68.0

中手骨 III *metacarpus* III

全 長	GL	} 91.2 27.4 22.6
近位端最大幅	B P	
遠位端最大幅	B d	

中足骨 IV *metatarsus*

近位端最大幅	B P	} 19.0 20.0 20.2
遠位端最大幅	B d	

ノロジカ

中・大型の獣の中ではもっとも多く遺骸をのこしていた。イノシシや大型のシカに比べれば捕獲し易いこともあったのであろう。また、この骨が骨器の中で刺突具として使われているところをみると、大きさや長さがそれに適したものであったためと思われ、この種のシカが貝塚人たちにとって主要な狩猟獣であったことが推察される。

肩甲骨 *scapula*

肩甲窩径	B G	} 21.5 22.8 17.5 19.3 19.8 12.5
肩甲頸幅	S L C	

橈 骨 *radius*

全 長 GL 144.0

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

近位端最大幅	B d	} 24.4	26.0
骨体最小幅	S D		
遠位端最大幅	B d		
尺骨 <i>ulna</i>			
肘突起径	D P A	} 24.0	
肘頭最小径	S D O		20.9
中手骨			
近位端最大幅	B P		22.0
骨体最小幅	S C		14.0
遠位端最大幅	B d		21.5
大腿骨 <i>femur</i>			
近位端最大幅	B P		46.5
脛骨 <i>tibiotarsus</i>			
骨体最小幅	S D		17.0
遠位端最大幅	B d		28.4
中足骨 <i>metatarsus</i>			
近位端最大幅	B P		18.4
遠位端最大幅	B d	22.0	24.3

タイリクジカ

シカの遺骸は少ない。直良報文中には記載されていない。筆者のみた標本中にも、頸椎、下顎骨片、寛骨片を認めたにすぎない。遺跡周辺のような平原的な地形の広がるところでは棲息が限られたのではないかと思われる。

下顎枝部分がほぼ原形を留める標本であるが、これとても筋突起を欠き、骨体部分も割れているのをおろそかにして復原したものである。

寛骨は右側の坐骨部分がのこるもので、寛骨臼月状面の半ばから脱れている若い個体のものである。

下顎枝最小幅 45.7

下顎角下縁より関節突起上面までの高さ 129.0

関節突起幅 30.0

寛骨臼月状面最大幅 32.7

腸骨・坐骨両骨体接合部での幅 47.0 (寛骨臼中央位置と坐骨後縁間)

ウシ

金子 浩 昌

部位の判明する標本は上腕骨遠位端1点、椎体の棘突起片1点があったのみである。

上腕骨の遠位端片は滑車部分の原形をのこすもののみで、骨体部はほとんど破損している標本である。当初の打ち割りの痕跡も一部に見られるようではあるが、大部分がその後の破損である。骨表面の風化も著しい。

上腕骨滑車部幅 (BT) 100.8

ウシの骨は直良報文中にも中手骨、中節骨があり、いずれもこの上腕骨に見合う程の大きさを持ち、かなり大きいものである。なお、ウシについては、かつて赤峰紅山後の基地より上腕骨が出土していて報告されているが、その上腕骨遠位端滑車幅が80.0あり、今回のものには及ばないが、これも大きい方である。現代和牛とほぼ同じか、あるいは額拉蘇C例のをさらに上廻る大きさである。本遺跡でのウシの骨の出土は少なく飼育を積極的に考える程のものではないと思われるが、なお、今後の比較資料の増加を待ちたい。

額拉蘇 C 遺跡出土の動物遺存体の特徴

貝 類

イシガイとドブガイ属が採集されている。イシガイの方が数が多いが、これは殻が丈夫なためであろう。湖・沼の泥底に多棲する貝種であり、手近かに採れるので貝塚を築く程になる。しかし、額拉蘇C遺跡ではいわゆる貝塚を形成する程に多量に包含されていないという。日本の場合では、淡水系貝塚としてイシガイ主体の貝塚は、東北地方の北上川中流域にかなりの規模のものをみる。おそらくそれと共通した立地条件であったとみてよいであろう。別にのべているように、本遺跡からは多数のガン・カモ類の遺骸が出土している。これらが飛来する広い湖沼が当時あったはずであり、そこにはイシガイ、ドブガイ、タニシ類が多棲し、重要な食料の資源になっていたことが推察される。

魚 類

魚類もまた少なくなかった。そのすべては淡水魚であるが、コイ科のソウギョ、ウグイ、ナマズ、ギギの類、カムルチーが検出され、特にソウギョ、ギギ、カムルチーが多かった。また大型の個体のものが目立ったのも特徴的である。

ソウギョはゆるい流れの川、これにつづく湖沼の中・下層を活発に泳ぎ、水草の繁った川辺、湖岸にすみ、春夏が食欲旺盛で冬は深みですごす。

カムルチーも平地の湖沼、緩流の砂泥底の水草の繁ったところに好んでかくれすむ。

これらの魚を捕るために、この地方では種々の網漁法、これには陸地から引く引き網、投網的なもの、河川の一部又は濠筋を遮断して網を張る方法などを工夫してきた。また、夏期、河川の氾濫

する時期に、魚が泡（大規模な水溜り）あるいは小支流に集るので、これが減水してきて本流に出ようとするのを簀などを使い追い込み捕える方法がある。本遺跡からは、こうした漁法を積極的に裏付ける遺物を見出してはいないが、出土している魚類の生態を併せ考え、かかる漁法が当時においても行われていたことを推測することは可能であろう。なお、本遺跡から出土している骨角器の中には幾つかの刺突具があるが、これについても漁撈用のものと考えられる加工を特にみるものはないが、広い意味での刺突具であるから使えないわけではないであろう。また、他の遺跡から知られている逆刺をもつやす状の刺突具あるいは銚頭などがつくられた可能性もあり、漁撈活動のさかんであったことは充分考えられるのである。

鳥類

鳥骨もまた多く出土した。大型の猛禽類、アビ、カイツブリのそれぞれ1乃至数個の骨を除くと他はすべてガンカモ類であり、特にヒシクイ、ガンが主体を占め、またその量も多かった。表記したものの他に断片的な骨がなおあり、それらがガン、ヒシクイである可能性は強い。おそらくかなりの量の骨が埋存するのであろう。ガンよりもヒシクイの方が多いたのは、その豊富な棲息数を反映するのであろう。これらはシベリア東北部にて蕃殖し、冬季に南下飛来する。本遺址よりこの種の鳥の遺骸を多出するのは、この付近にこれらの鳥の集まる広々とした、水量も豊かな沼沢地があったからであろう。筆者はこのような鳥の遺骸を検して、その規模こそ異なるが、我が国東北地方の仙台平野の北部にひろがる湖沼群沿岸の貝塚を思い出さざるを得ない。ここには今も伊豆沼、長沼というかなり広い沼がひろがるが、縄文時代にはそれらが一つになって広大な沼沢地帯を形成していた。その周りには我が国では唯一の淡水貝塚群が形成され、その規模も大きい。およそ縄文中期以降の形成であり、イシガイ、オオタニシを主とする。そして、何より特徴的なのは淡水のフナ、ギギを主とする魚骨、ヒシクイ、ガン、カモ、オオハクチョウを主とする鳥骨の豊富に出土することである。獣骨ももちろん多い。当然であるが、これら魚、鳥骨の遺存の状態も酷似している。骨角器にみる豊富な刺突具類の出土も共通する。直接的な文化のつながりはもちろん無いが、人々の自然への対応の在り方にみる共通点に深い興味を覚えるのである。筆者らが上述した淡水域での縄文時代の鳥猟を考えたとき、朝もやの中で餌をついばむヒシクイ（昼間は広大な干潟に出て休み人を寄せつけない）を狙う縄文人を想像したが、ここ額拉蘇の近傍においても同様の鳥猟が考えられるのである。

なお、キジの出土も多い。周囲にひろがる原野に多棲していたのであろう。キジについてはその飼育をかなり早くに考えているが、今回の資料に関しては、完存する骨の無かったこと、鳥口骨など飼育形質を確かめ得る標本のこれまた欠いたことなどから、明らかにすることはできなかった。

哺乳類

獣骨の出土もまた多い。狩猟獣としては中型の食肉獣とイノシシ、シカ類が主体である。食肉獣

については、筆者の検した資料、直良報文中の資料とも特に目立つ程ではなかった。

大型の偶蹄類については、今回の資料の方が量的には多くの骨がのこされていた（顎骨は直良報文に記載されている）。イノシン、小型のシカであるノロジカと思われる骨がそれぞれ数個体以上あり、狩猟の主たる対象であった。おそらく当時の生息数においても、もっとも多い大形の獣であったと思われる。ノロジカは、山地地域の森林、灌木叢と河谷のみならず、ただ草本植物のみ見受けられる草原域にも棲息する。イノシンはカシ、ナラ林の分布がみられる地域では多棲したであろう。

食肉獣であるタヌキ、キツネもまたこうした森林地帯から草原地帯に棲息し、特に湖畔域ではカモ類を狙うキツネ、魚類漁に熱心なタヌキが多棲したと思われる。またノウサギ類もこの地域の平原に棲息していたことが推測される。

次にイヌ科の獣についてであるが、直良報文では、オオカミの左側下顎骨の破片が記載されているが、これについては中庸の大きさのものとあり、筆者の推定では下顎骨長 165.0 位になるものようである。イヌについては、直良報文中に 8 標本があり、そのうち成獣骨で、橈骨左全長 167.0、同近位端 20.5 とあるのは長谷部分類（1952）の大型に属すもので、次位の全長 155.5、近位端幅 20.0 もそれに次ぐ中大型である。筆者の検した標本もこの中大型である。ひるがえって、中国各地で出土している新石器時代犬をみるとそれらは大きい方で頭蓋全長 180.0 で中型犬であり、浙江省河姆渡遺跡出土例が 164.7 の中小型より 181.0 の中型犬に属し、赤峰紅山後のイヌも下顎骨からの推定で小型および中小型のものである。これからみると、額拉蘇 C でイヌとされたもので、上述した中大、大型に属する標本は中国の新石器時代犬の範囲を超えるものではないかと思われる。つまりオオカミにはいる大きさのものではないかと思われる。これについては今後の検討を待ちたい。

要 約

額拉蘇 C 遺跡出土の動物遺骸についての概要をのべたが、これらはこの額拉蘇 C の丘に住居した人々の採集、漁猟の活動を知る好資料を提供するものであった。

先ず貝類は日本におけるような貝塚を形成する程に多くは採集されていなかったようであるが、淡水貝のもろい貝質のために破損する貝も少なくなかったと思われ、やはり実際はかなり利用されていたとみなくてはならないであろう。採取もまた容易であり、大型の貝であれば肉量もまた豊富であったから、四季を通じての利用度の高い食料資源であったと思うのである。

魚類は水辺に住む人々にとってさらに貴重な食料源となったはずである。すでにのべたように本遺跡で知られた魚はソウギョ、カムルチー、ギギ類が主体であって、ここ中国東北区の特徴である沼沢、河川においてはこれらの淡水魚が多産する。この地区の沼沢は長期間の滞水によって湿生の多年生草本植物で組成された沼沢植物が生長し、ここに草食性のコイ科魚種ソウギョ、タイワンドジウ科のカムルチーが多棲した。現在でもこれらは淡水魚の代表的魚類の一つであり、湿地性遺

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

跡からの出土例も多い。採集されている骨は体長40~50cm以上のものが多く、供給される肉量は豊富であった。また、小川を遡上する幼魚を捕える工夫もしていたのではないかと思われる。日本の淡水貝塚でコイ、フナ、ギギなどの幼魚の骨も多いことを思いおこす。大型のソウギョやカムルチーにはヤス漁、網漁法が主であったと思われる。

鳥骨もまた豊富であった。水鳥としてはヒシクイやガンが主体で、その骨の多いことからみるとこの水域には、湖沼の結氷する厳冬期を除いての初冬、春先、この沼に翼を休める水鳥は多かったのであろう。小型の水鳥よりも大型のヒシクイ、ガンがねらい易く、また個体数も多かったことが推測される。

こうした水辺の丘陵上はまたキジの棲息地であった。これも狩猟の好対象となったはずである。このキジのひなをねらって、タカ類などの猛禽類も飛来し、稀にはワシ・タカ類を捕獲することもあった。

獣の種類も多く、狩猟の好対象となった。キツネ、タヌキなどの食肉獣もあるが、イノシシ、ノロジカが主対象であった。これらは毛皮、肉はもちろん骨製品や牙製品の素材を提供するものでもあり、量も重要な生活の資源になったであろう。こうした狩猟に大事な伴侶となったのがイヌである。全体の獣骨の量からみて、イヌの骨の出土量はかなり多いと考えられる。このイヌの大きさは中型あるいはそれ以上の大きさで、新石器時代の飼育犬としては大きい。これは北東アジアのイヌの歴史を考える上で、時代的にも最も古い例で注目されよう。

以上で額拉蘇C遺跡出土の動物遺骸についての記述を終えるが、本資料が発掘後長期間を経、しかも一部標本が現存しないこと、比較資料が充分でないことなどのために考察する範囲もまた自ら限られた。しかし、これらの資料を通観してそのいずれもが額拉蘇C新石器時代人の生活に深く関わるものであったことは疑いない。そして今後関連する諸遺跡の動物遺存体についての報告がより多く、また詳細に行われていくことによって遺跡間の特徴、相違を具体的に知り得ることになる。そうした機会の来ることを待つものである。

骨 角 器

5点の骨角器が採集されている。5点ともに形態を異にし、変異に富む製作であったと思われる。利器とその他に分けて記述する。

I 利 器

刺突具

1. 幅広・扁平な柄部をもつ刺突具

大型のシカの脛骨の骨体外側を使ってつくったものである。扁平な握り部分の片側に脛骨特有の

金子浩昌

栄養孔があるところからその利用部分が明らかであるが、脛骨外側の扁平部分と、骨質の厚味の増す骨の角を巧みに利用しているわけである。もちろん、これは厚味のある尖頭部をつくり出す目的からであった。

握り部分は骨を削り込んでへら状に仕上げ、丸味をもたず。表・裏面には骨の自然面がまだのこる。尖頭部は次第に細まり、よく骨を削り込んでいる。先端はさらに細く長かったのであろうが、その部分は折れ、そのまま使われている。表面には整形時の擦痕がみられる。

現存長	126.8
最大幅	22.3
同位置での厚さ	5.8

2. 半裁管状骨の錐状刺突具

シカ類の中足骨（左）の近位端から中間部までの前面を使ったもので、中足骨を縦位置にして横割りをしている。ほぼ真半分に割っているので、厚味のある製品となっている。錐状の加工は先端部のみにみられ鋭く尖る。基部は中足骨の近位端がそのまま使われている。器体全面に摩痕が付き、また手にもった磨滅のあとがみられる。

現存長	79.5
近位端幅×同前後茎	20.5×13.0

3. 薄く幅広の縫針

大型獣の肋骨を使ったもので、肋骨体の内・外側のいずれかを用い、全面を研磨扁平にし、両端を尖らし、一方の端に穿孔したものである。穿孔は器体の中央に、長軸に平行する長楕円を呈して開孔するもので、穿孔の方法はいわゆる擦り切り法であったことが穿孔部の形状からわかる。

器体は薄く、メド穴付近の厚いところで 3.0mm、先端部では 2.0mm である。全面はよく研磨され、切断の切口などをのこしていない。やや幅広いものの、縫針としての機能を十分に持つといえよう。

全長	113.4
最大幅	11.0
最大幅部分の厚さ	3.0

4. 細長棒状の刺突具

鹿角製である。先端部に近い 5 cm 程がのこるのみの断片であるが、おそらくこのまま細長い棒状

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

のつくりになるのであろう。鹿角を擦り切り法で角幹にそって素材を切り取り、それを整形していったもので、片面に海綿体がみえている。全長、頂部加工の状態が不明のために利器か装身具的なものか明らかでないが、加工が全面に及び、均整のとれた棒状を呈することは装身具的な針ではないかということ推測させる。

現存長 49.0
断面径 7.3×6.3

5. 長管骨の輪切加工品

シカ類の脛骨を輪切りにした切り口を片側にもち、他の一方の端は打ち割られている。この骨片は、これ自体が骨製品というのではなく、おそらく、切りはなされた方に製作の目的物があったと思われる。しかし、それがどのような形をもったものであったか、例えば幾つかの輪切りが行われて、リング状のものがつくられたのか、あるいは一方の骨端を含むものであったということは全く不明である。

現存長 53.0
切断面径 17.6×14.5

額拉蘇C 遺跡出土の骨角加工品の特質

拉蘇遺C跡出土の骨角加工品5点は、1点を除いてすべて刺突によってその用途を果すべきものであったが、4点ともに素材と形態が異なり、従ってまた用法、用途の異なったことが推察されよう。

1. 幅広、扁平な柄部をもつ刺突具

もっとも大型で、頑丈であり、把握に適した柄をもつ刺突具である。先端が一度折れているところから、かなり荒っぽい使用であったことが推察されよう。一方、柄部の扁平部分もへら状の道具として使うことも可能である。おそらく、この両様の使用面をもつ道具として、日常使われていたものであろう。

類品として形態、素材ともに同じ例を関連する遺跡から見出すことはできないが、北朝鮮の西浦項遺跡の新石器時代Ⅰ・Ⅱ期にみる大形幅広の骨器に類似点が認められる(西浦項報告 17図1, 2 p. 50)。

2. 半裁管状骨の刺突具: 製作法は単純で、シカ類の中足骨を縦方向に裂き、一方を尖らすという単純なつくりのものである。柄部に当たる部分は、中足骨前面の丸味の強い管状部になっていて、必ずしも握るのに適した形ではない。従って、この種の骨を骨器にするには、より扁平な後面部を

使うことが多い。しかし、後面部を使うと扁平ではあるが、それだけ骨質がうすくなり、丈夫さには欠ける。これに対して、前面部は中央に溝がはいるものの、その両側の厚みはあり、加工法によって、このような錐状の刺突具がつくられる。

錐は骨角牙製品の中で種々の形でみられるが、本遺跡と関連する遺跡の例では、中国黒龍江省新开流遺跡上層の骨器に数種の錐が認められる。シカ類の中手骨を割り、その前面部の利用例（18図17）、その他棒状に加工した骨もしくは角を使っている例（18図16, 18, 19～21）があり、さらにシカの尺骨製品（19図, 2）がある。また肇源白金宝遺跡の例（図7, 9, 15, 16）がある。以上は額拉蘇C例と共通したつくり方で、この種の道具が少なからずつくられたことを示す。

3. 扁平幅広の縫針

メド孔をもち、よく研磨された全体は縫針にふさわしい形である。ただし本例のように幅広いは珍しい。幅の狭い例としては、肇源白金宝遺跡の「骨針」（図7, 8）はその典型である。これの素材については報文に記されていないが、おそらく鳥骨製であろう。このような幅狭い骨針は中国の中原地方では新石器時代に多くの出土例がある、周辺地域では少ないようである。本遺跡例が大形獣の肋骨製である点も特異である。当然この骨針によって縫われるものにも違いがあろう。今後の類品の出土を待って考察したい。

4. 細長棒状の刺突具

装飾用の針ではないかと考えたが、頂部に装飾をもつ針は、この地方では極めて少なく、北朝鮮においても新石器時代Ⅰ・Ⅱという時期にはみられない。肇源白金宝遺跡の簪としたものは頂部を平らたくして先端との区別が意識されており、これだけでも装飾的な加工とみられよう。しかし、本遺跡から出土する豊富な魚骨のことを考え、これをやす状の刺突具の一つであったとも考えられるが、これにはやはり基部までのこる全体の形状からの観察が不可欠である。つまり基部の形状によって、その着柄法を推測し、漁具としての特徴を理解しなければならないからである。残念ながら本資料はそうした考察を行うには断片的である。類品また直ちに認め難いので、これについても後考に待つ他ない。

5. シカ脛骨の輪切り残片

すでにのべたように直接の製品ではなく、加工残片であるが、この残片から推測される輪状の加工品、あるいは脛骨の遠位端が切りとられているものと推定されるので、そうした骨端をもつ装身具的な加工品など出土例は、この地方にみる限りないようである。しかし、山東省大汶口遺跡では、大型獣の肢骨を輪切りにし、穿孔、溝つけなどの加工を施したものがかなり出土している。大きいものは腕にはめ、垂下したものもあろう（P. 101, 図85～87, 図版91～93, 象牙製品も含む）。このようなものが額拉蘇Cにおいてつくられたかどうかは不明であるが、加工骨からの推測は可能であろう。

以上額拉蘇C遺跡において採集された5点の骨角加工品は、数少ないながら、この地域における骨角器文化の伝統を考えさせるものであり、生活用具として重要な役割を果たしていたものであるこ

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

とが推察されよう。もちろん、採集された加工品のみがここでつくられたとは考え難い。この地域では独特の形態をもつ漁撈用のやすあるいは銛頭がつくられている。本遺跡の人々もそうした骨角器を使っていたに違いない。ただ、それを遺物で裏付けるには今後の調査に待たねばならない。それらは本遺址の骨角器文化の位置付けを考える上で大きな役割を果すことになるであろう。

(1986. 6. 12 脱稿)

文 献

- 寿振黄主編 中国経済動物誌 獣類 科学出版社 1964
邦作新主編 中国経済動物誌 鳥類 科学出版社 1966
伍献文他編 中国経済動物誌 淡水魚類 科学出版社 1964
伍献文等 中国鯉科魚類誌 上・下 上海科学技術出版社 1964
刘月英他編 中国経済動物誌 淡水軟体動物 科学出版社 1979
馬逸清等編著 黒龍江省獸類誌 黒龍江科学技術出版社 1986 哈爾濱
木村 重：統魚の生態 川魚編 東京 1984
南滿洲鉄道株式会社北滿經濟調査所編 北滿野生哺乳類誌 興亜書院 1934
野沢重一 満州国漁具便覧 營口水産試験場(康德4)
草間俊一, 金子浩昌 岩手県花泉町貝島貝塚一第4次調査報告一 1971.12
加藤 孝, 後藤勝彦 登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告 宮城県南方町 1975年3月
青柳兵司：日本列島産淡水魚類総説 東京 1957
林 謙作 宮城県下の縄文期貝塚群 宮城の研究 1 清文堂 1985
梁思永 昂昂溪史前遺址「国立中央研究院歴史言語研究集刊」4—1 1932 北京
黒龍江省文物考古工作隊 密山県新開流遺址『考古学報』 1979.4 北京
黒龍江省文物考古工作隊, 黒龍江肇源白金宝遺址第一次発掘 考古 第4期 1980
金用珩・徐国泰, 西浦項原始遺跡発掘報告 考古民俗論文集 4 1972
山東省文物管理处, 済南市博物館編 大汶口 新石花時代墓葬発掘報告 1974 北京
浙江省博物館自然組 河姆渡遺址動植物遺存的鑒定研究 考古学報 1978
周本雄 河北武安磁山遺址的動物骨骸 考古学報 1981 第1期
傅仁又 大連郭家村遺址的動物遺骨 考古学報 1984 第3期
なお、1945年以後の北アジア諸地域の遺跡出土の動物骨報文についての文献は、直良報文中にあるので、そのすべては省略した。
- 任美鏞主編：中国自然地理綱要（修訂版） 1982 北京
中国科学院〈中国自然地理〉編集委員会編：中国の動物地理 日中出版 1979

Faunal Remains and Artifacts of Bone and Antler from Elasu C Site

Hiromasa KANEKO

1. Faunal remains

I. Mollusks

Many Unionidae were recovered. They inhabit muddy soils.

II. Vertebrata

a) Fishes: Grass carp (*Ctenopharyngodon*), snakeheaded fish, leiyu (*Ophicephalus argus*) etc. were recovered and most are large-sized.

b) Birds: Many bird bones were also recovered. Bone of the Eastern bear-goose are largest in number. Others are of the grebe, hawk-eagle etc. Probably, at that time, there were lakes or swamps around the site, where such birds and fishes gathered.

Also, bones of the pheasant were uncovered in quantities. The author cannot judge whether they are chickens or not.

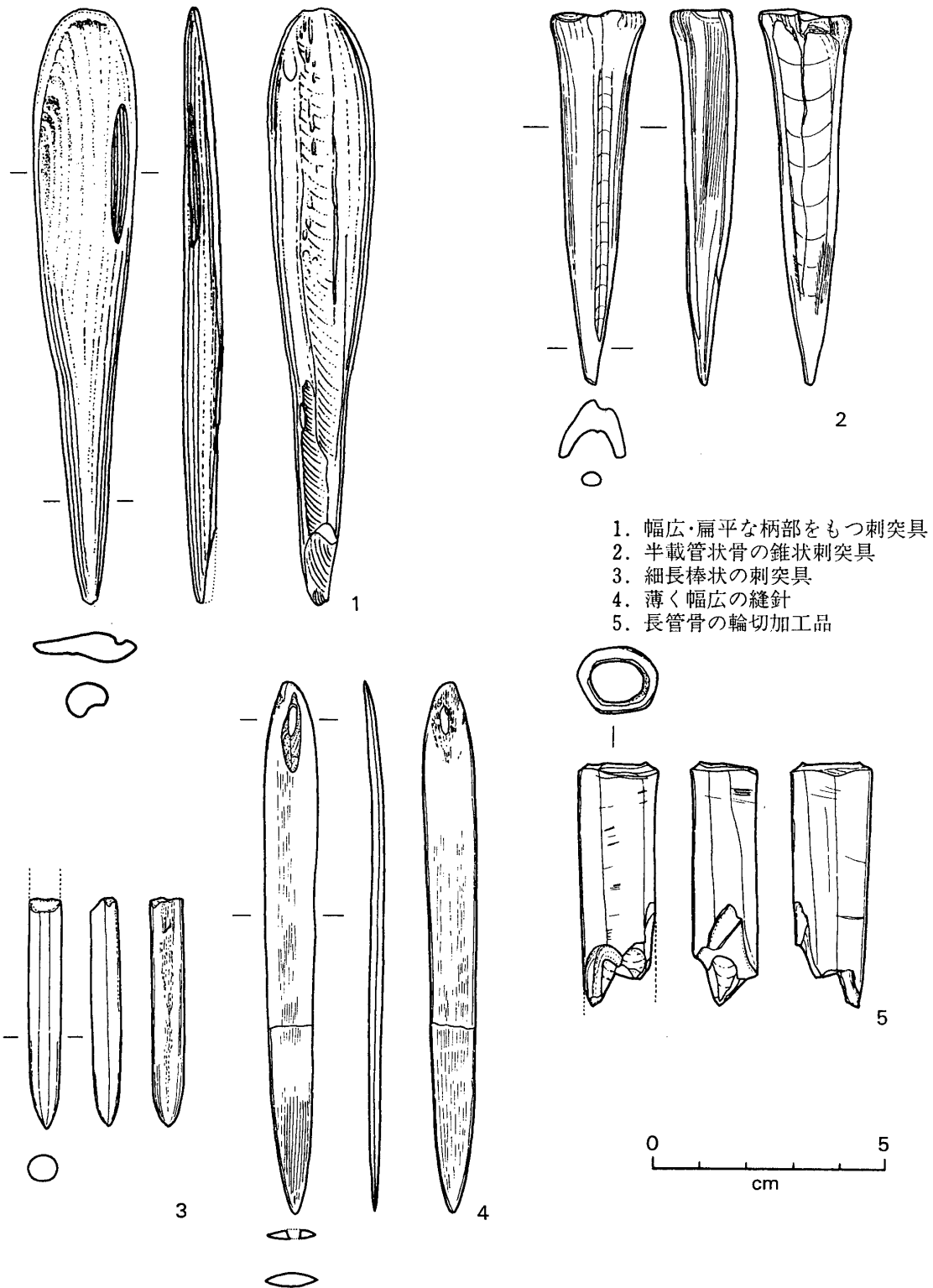
c) Mammals: Many animal bones were also recovered. Most are bones of the hare, dog, wolf, fox, racoon-dog, deer and wild boar. Particularly, abundant are bones of *Canidae* that involve the fox and dog. Dogs are middle-sized, but somewhat larger than dogs in Neolithic Middle China. we need to note that these dogs are the oldest in this district.

It is supposed that at that time, people hunted and fished on beaches where water was more abundant than is today, and hunted in surrounding elevated areas.

2. Artifacts of bone and antler

All are thrusting points except one. These points made of *tibiae* and *metatarsus* of deer, are very similar to those recovered from the mesolithic and neolithic sites in this district.

Another, which may be a needle, is made of an animal rib and is characterized by its width.



- 1. 幅広・扁平な柄部をもつ刺突具
- 2. 半載管状骨の錐状刺突具
- 3. 細長棒状の刺突具
- 4. 薄く幅広の縫針
- 5. 長管骨の輪切加工品

オロス遺跡出土の骨角製品

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

イシガイ (*Unio douglasiae*)

1 a b ~ 4 a b, a : 右殻, b : 左殻

1 ~ 4 b は殻の内側を示す

ソウギョ (*Ctenopharyngodon idellus*)

1 ~ 7 咽頭骨右上部

8 ~ 13 咽頭骨右下部

14 ~ 15 咽頭骨左上部

16 ~ 18 咽頭骨左下部

19 咽頭骨左下部

20 背鰭第一棘

カムルチー (*Ophicephalus argus*)

21 前上顎骨左咬面

22 ~ 23 歯骨右側面

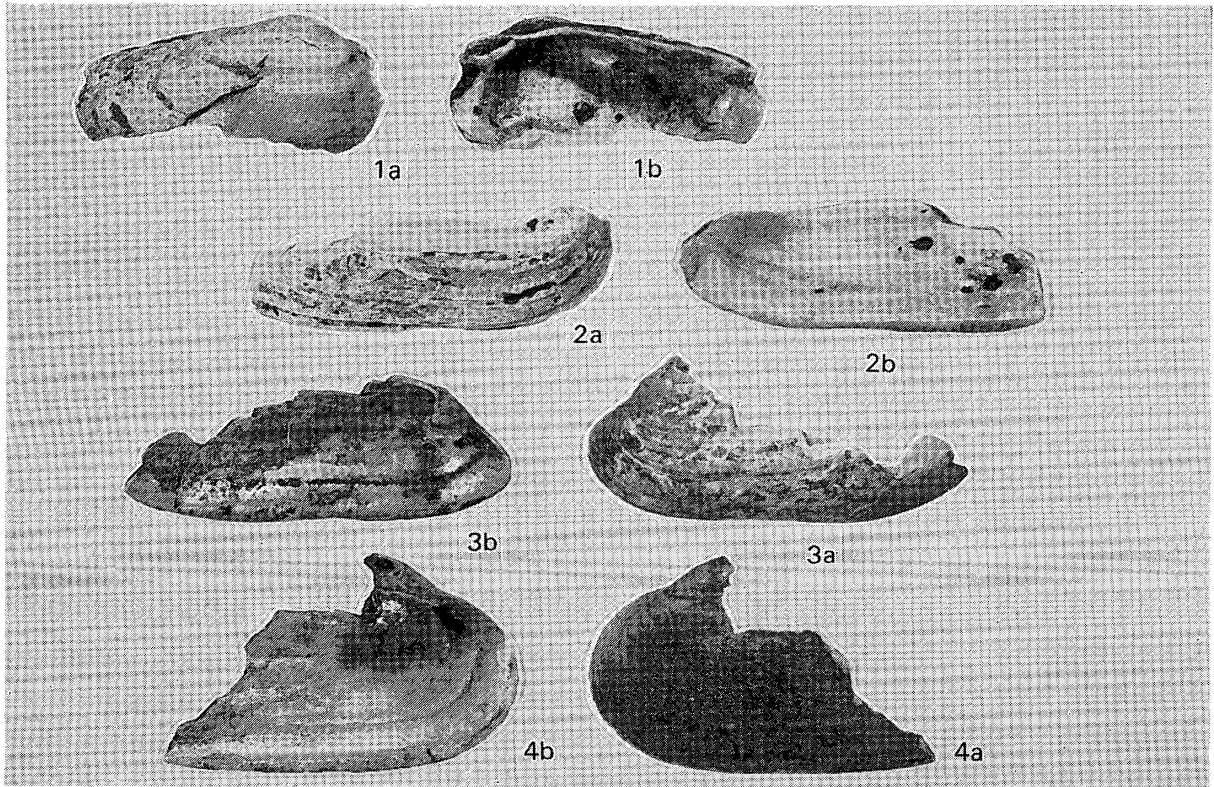
24 ~ 27 歯骨左内面

28 a · b 主鰓蓋骨左内・外面

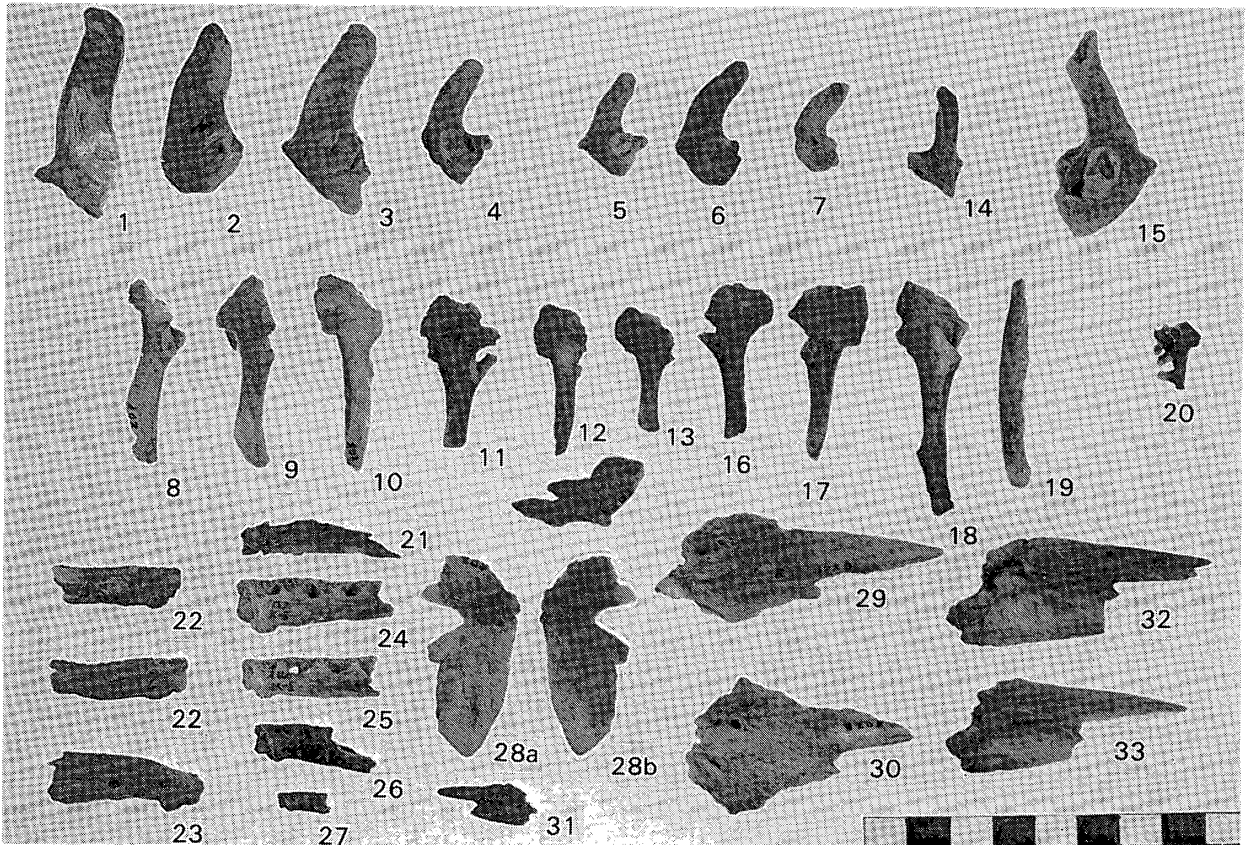
29 ~ 30 角骨右外面

31 角骨左外面

32 ~ 33 角骨左内面



インガイ (1/1)



ソウギョ (1~20), カルムチー (21~33), (1/2)

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

ナマズ科 属種不明 (Siluridae gen. et sp. indet.)

1. 前上顎骨右 咬面部
2. 歯骨右 咬面部
3. 胸鱗第1棘片 (基部を破片)
ギギ科属種不明 Bagridae gen. et sp. indet.
- 5~6 擬鎖骨右, 側面観, 両端欠損
- 7~8 擬鎖骨左, 内面観, 両端欠損
- 9 a・b 主鰓蓋骨左破片 (a:外側, b:内側)
- 10~13 胸鰓第1棘左 (末端を欠損する)
- 14~19 胸鰓第1棘右 (末端を欠損する)
種不明 sp. indet.
- 20 歯骨右破片

カイツブリ属 *Podiceps* sp.

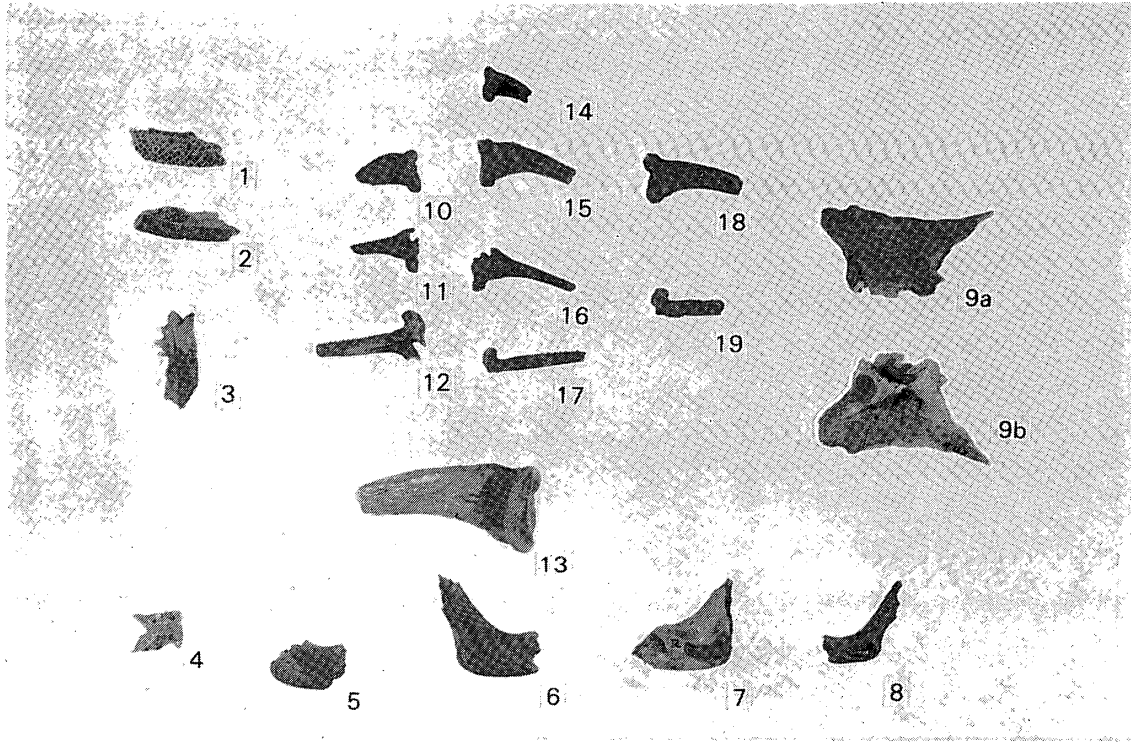
1. 鳥口骨左
2. 尺骨右遠位部
3. 中足骨右近位部

カモ属 *Anas* sp.

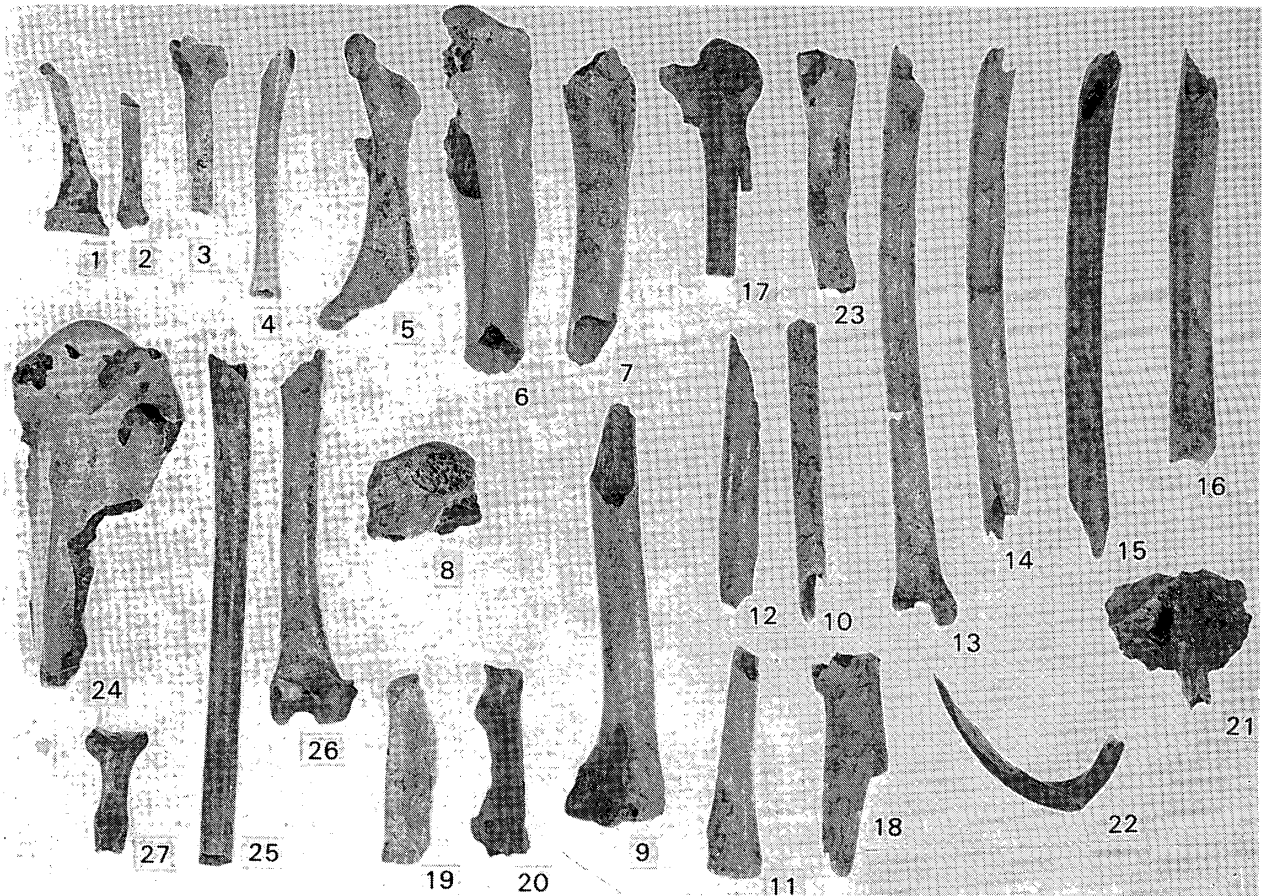
4. 上腕骨左両端欠

ヒシクイ属 *Anser* sp.

5. 鳥口骨左 (近位部一部欠損)
- 6~7 上腕骨右近位部
8. 上腕骨右近位骨端
9. 上腕骨左骨幹遠位部
10. 橈骨骨幹
11. 橈骨左遠位端
- 12~16 尺骨左骨幹
17. 中手骨右近位部
18. 中手骨左近位部骨端欠
- 19~20 第II指基節骨右
21. 胸骨近位部
22. 鎖骨
23. 大腿骨両端欠
ワシタカ類
24. 上腕骨左近位端
25. 尺骨骨右幹
26. 大腿骨右後面
27. 第I指基節骨左



ナマズ (1~3), ギギ (5~9), 種不明 (4) (1/3)



カイツブリ (1~3), ガン・カモ類 (4~23), ワシタカ類 (24~27) (1/2)

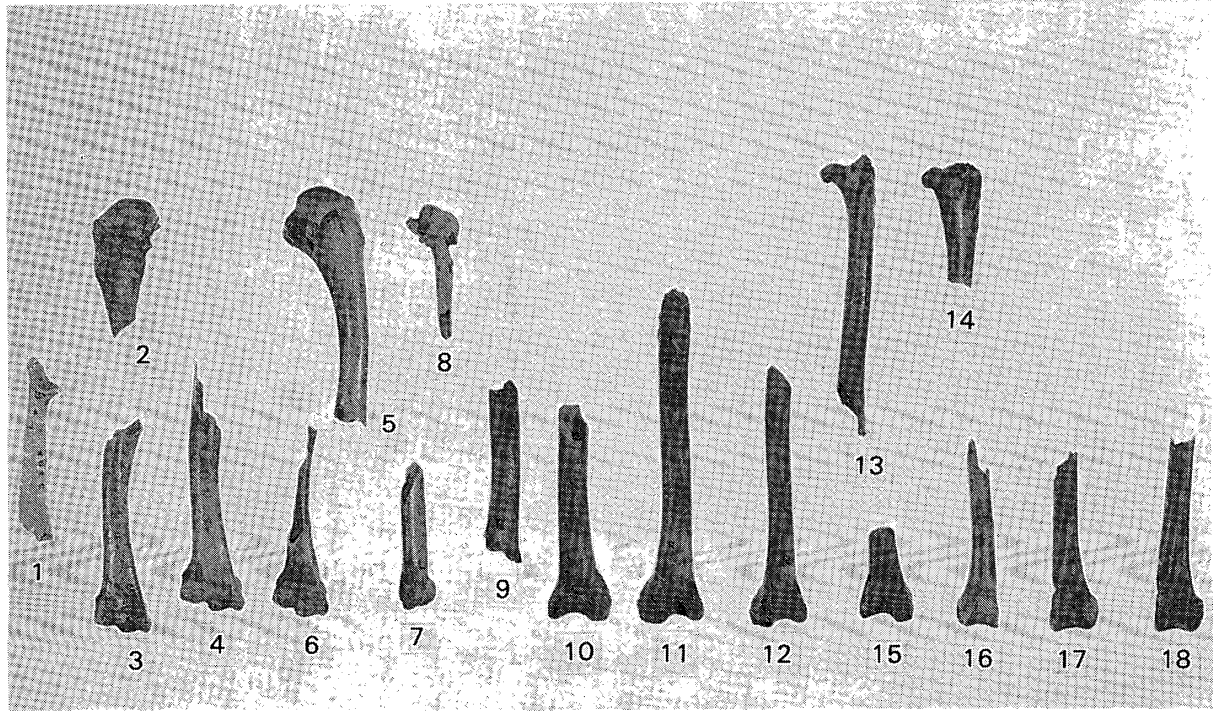
額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

キ シ (環頸雉) (*Phasianus colchicus*)

- 1 肩甲骨左近位端
- 2 上腕骨左近位部
- 3・4 上腕骨左近位・骨幹部
- 5 上腕骨右近位部
- 6 上腕骨右遠位部
- 7 尺骨左近位
- 8 中手骨右近位部
- 9 大腿骨右骨幹部
- 10~12 大腿骨右~遠位部
- 13・14 大腿骨左近位部
- 15 大腿骨左遠位部
- 16~18 脛骨右遠位部

イヌ (*Canis familiaris*)

- 1 a・b 下顎骨片左咬面と側面
- 2・3 肩甲骨右近位部
- 4 上腕骨右
- 5 上腕骨左遠位部片
- 6 橈骨左近位部 (骨端はずれ)
- 7 橈骨左近位・骨幹部 (〃)
- 8 橈骨右近位部
- 9 尺骨左近位部
- 10~12 尺骨右骨幹部
- 13 寛骨片右
- 14 大腿骨左近位, 骨幹 (骨端はずれ)
- 15 大腿骨左 (幼体, 遠位端を欠く)
- 16 脛骨左遠位部



キジ (1~18)



イヌ科

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

イヌ科 (*Canis familiaris*)

- 1 中足骨遠位端破損
- 2 大腿骨左 (幼体), 両端破損
- 3 脛骨左 (幼体), 両端破損

キツネ *Vulpes vulpes*

- 4 橈骨左近位, 骨幹部
- 5 橈骨左遠位 (遠位部)
- 6 尺骨左遠位端を欠く

タヌキ (*Nyctereutes procyonoides*)

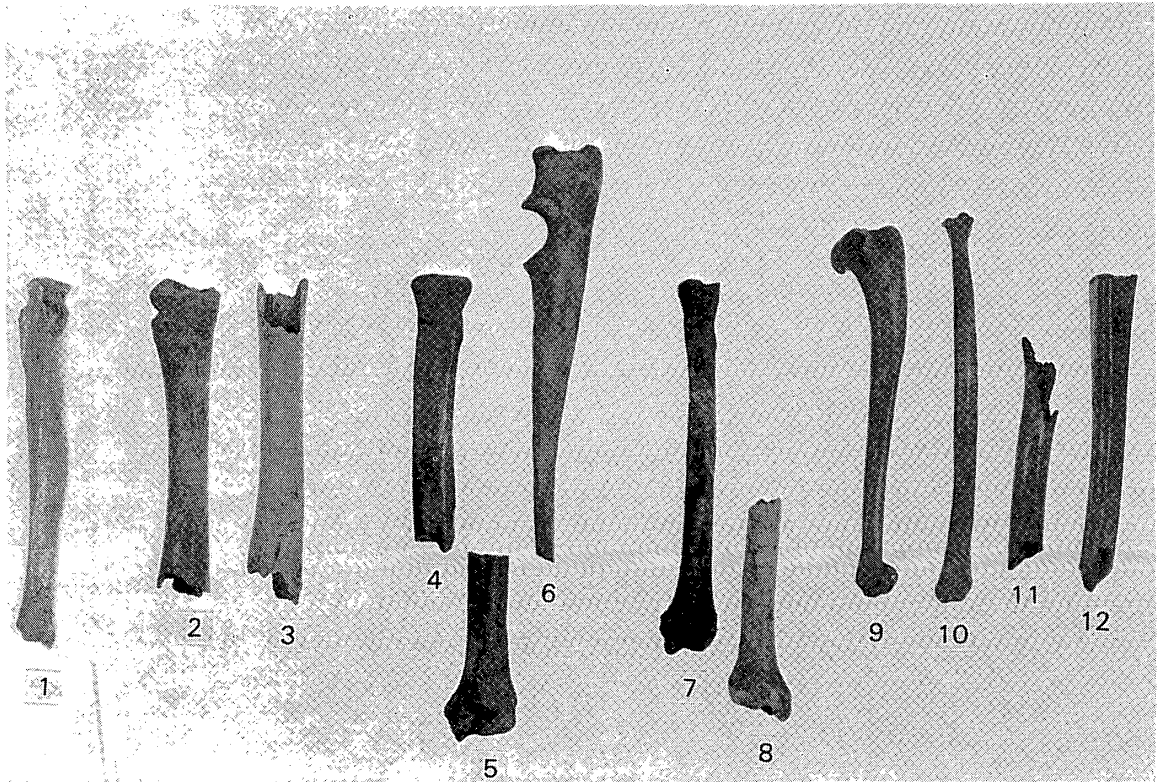
- 7 橈骨左近位部
- 8 脛骨左遠位部

ノウサギ属 (*Lepus sp.*)

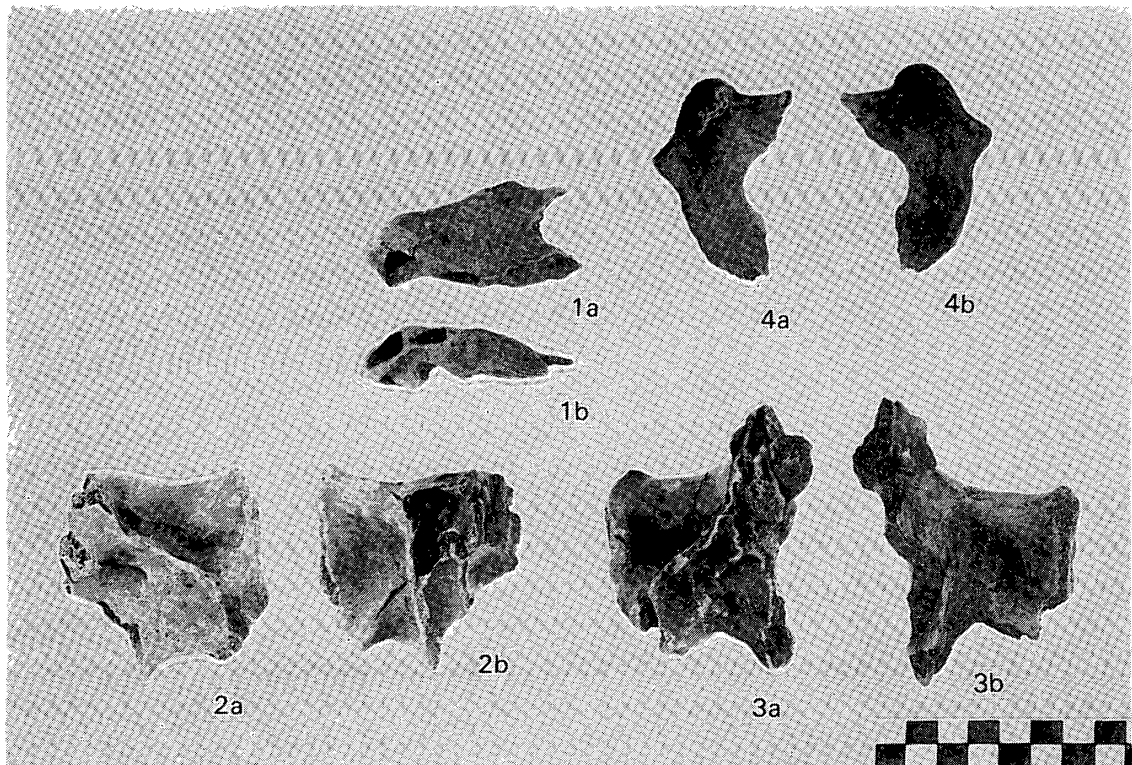
- 9 上腕骨左内側
- 10 橈骨左
- 11 大腿骨左骨幹部
- 12 脛骨左骨幹部

イノシシ (*Sus scroja*)

- 1 a b 切歯骨片左
- 2 a b 側頭骨左頬骨突起
- 3 a b 側頭骨右頬骨突起
- 4 a b 下顎枝左関節突起



イヌ (1~3), キツネ (4~6), タヌキ (6~8), ノウサギ (9~12) (1/2)

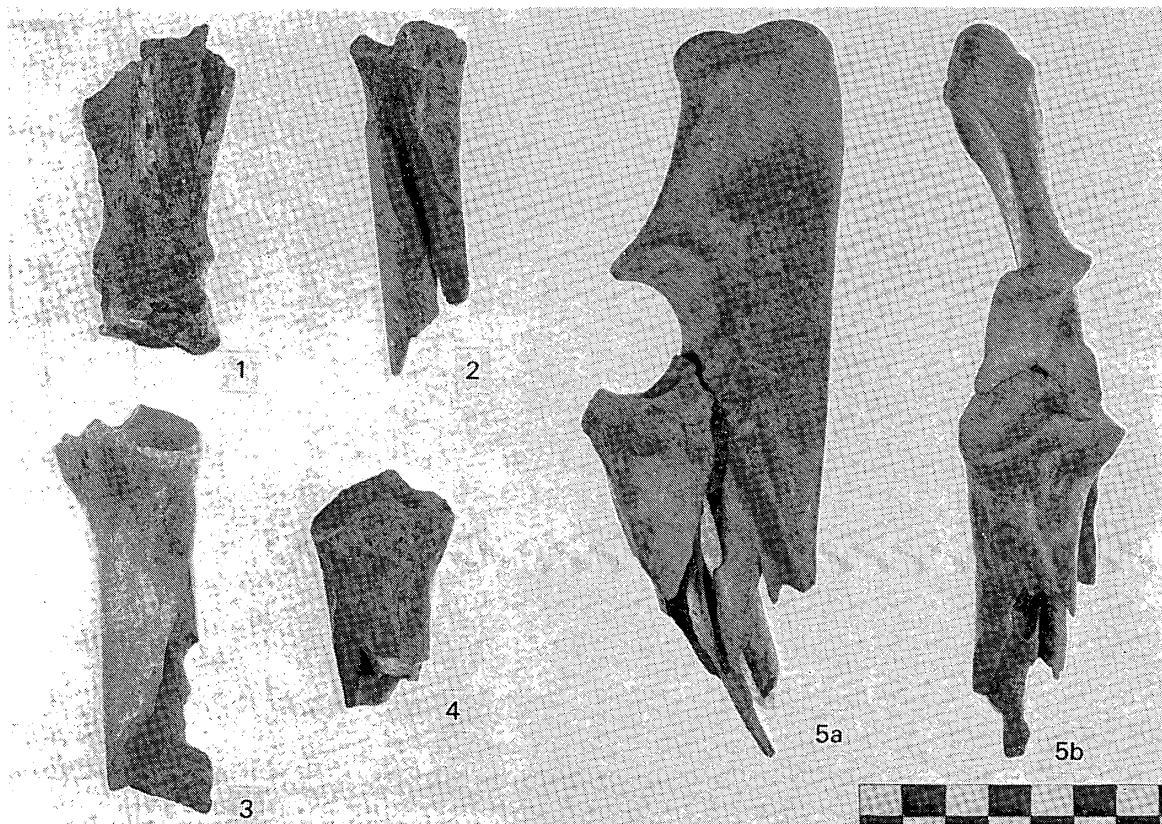


イノシシ

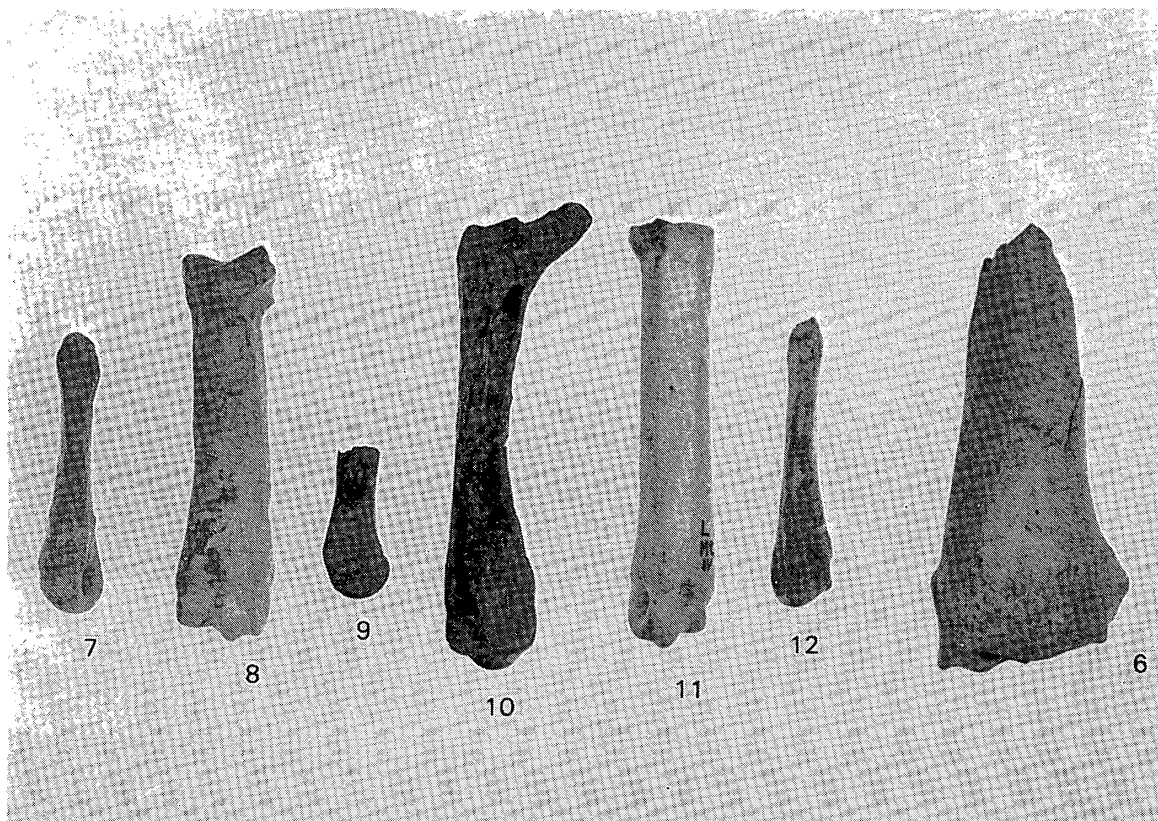
額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

イノシシ (*Sus scrofa*)

- 1 肩甲骨遠位部右, 後縁部を欠く, 外側面
- 2 橈骨近位部左, 外側部を欠き, その割れ口を示す
- 3 橈骨近位部左, 骨幹を打ち割る
- 4 橈骨近位部左
- 5 a b 橈骨・尺骨近位部
- 6 橈骨左遠位部
- 7 第V中手骨右
- 8 第III中手骨左
- 9 第II中足骨左, 遠位部
- 10 第V中足骨右, 黒く焼ける
- 11 第IV中足骨左
- 12 第II中手骨右



イノシシ



イノシシ

額拉蘇C (オロス) 遺跡出土の動物遺存体と骨角器

タイリクジカ (*Cervus hortulorum*)

- 1 下顎枝部分左, 筋突起部分を欠損
- 2 寛骨左, 寛骨臼部分

ウシ (*Bos taurus*)

- 3 胸椎棘突起片
- 4 上腕骨左遠位部

ノロジカ (*Capreolus capreolus*)

- 1 ~ 3 肩甲骨右遠位部
- 4 上腕骨左遠位部破片
- 5 橈骨左
- 6 尺骨左, 近位部
- 7 中手骨右近位部
- 8 中手骨遠位部
- 9 中足骨近位部 (前面は割れる)
- 10・11 中足骨遠位部
- 12 大腿骨左近位部
- 13 脛骨右遠位部 (骨端は脱れる)
- 14 脛骨左遠位部



タイリクジカ (1・2), ウシ (3・4)



ノロジカ (1~14)

額拉蘇C（オロス）遺跡出土の動物遺存体と骨角器

- 1 a b 幅広・扁平な柄部をもつ刺突具
- 2 a b 半裁管状骨の錐状刺突具
- 3 a b 薄く幅広の縫針
- 4 a b 細長棒状の刺突具
- 5 a b 長管骨の輪切加工品

